Your and my story-君と私の物語-

マヨラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｙｏｕｒ　ａｎｄ　ｍｙ　ｓｔｏｒｙ－君と私の物語－

【Ｎコード】
Ｎ９２６１Ｉ

【作者名】
マヨラー

【あらすじ】
大嫌い、それでも傍にいさせて…。あなたの隣を歩かせて…。

１ｓｔ．「すれ違いの物語」

＞ｉ３４１９｜５５４＜

とある国の王宮の…

とある王女の部屋の中…

とある王女と

とある兵長が

とある話をしていました。

「本当に行く気なの？」

王女が部屋の窓から夜空を見上げながら言いました。

「はい、王女。近頃の王の行動は流石に気が狂ってるとしか言い様がありません。少し話をしてきたいと思っております。」

兵長が膝まずいたまま言いました。

相変わらず王女は夜空を見ています。

夜空は……曇っていました。

『Ｙｏｕｒ　ａｎｄ　ｍｙ　ｓｔｏｒｙ―君と私の物語―』

いつからだろう…

私があなたに、王女と呼ばれるようになったのは…。

いつからだろう…

私があなたを、兵長と呼ぶようになったのは…。

いつからあなたは私の前で膝まずくようになり…

いつから私はあなたではなく空を見詰めるようになった…？

私はただ…かつての様に、あなたと対等でいたかった。

今のあなたは、私の少し我儘な文句に「申し訳ありません」としか答えてくれないの？

もう昔の様に「うるせぇよ」って言ってくれないの？

ねぇ…ねぇ……

ねぇったら……

あなたは……いつから…。

いつ…から……。

「王女……？」

兵長の声で、現実へと引き戻された私。

特に意識したわけでは無いのに、

口が勝手に動いて…。

気が付いたら呟いていた。

「その呼び方やめてよ……。」

「……はい？」

幼馴染みのあなたに”王女”と呼ばれるのは、何となく嫌だった。

きっとその気持ちが勝手に出てしまったんだと思う。

「……何でもないわ…。」

知らぬ間にが呟いていた事に、自分で驚いた。

依然として、私は空を見ている…。

私が空を見ているのは、膝まずくあなたを見たくないから。

空を見ていれば、膝まずくあなたが視界に入らないから。

あなたはそんなみっともない格好する性格じゃ無かった。

皆が私の事を”王女”と呼んでも、あなただけは違った。

あなただけが私の名前を呼んでくれた。

あなただけが私と対等であってくれた。

毎日二人で喧嘩して、あなただけが大臣に怒られて…

それでもあなたは毎日私と喧嘩してくれた。

そんなあなたが目の前で膝まずいているのを見るのは、辛かった。

独りになった気がした。

「では王女、私は行って参りますが…その前にこれを…」

兵長が膝まずいたまま、懐から何かを取り出したけど…

私は夜空を見上げていたから、それが何だか分からなかった。

「何か渡したい物でもあるなら、そのみっともない格好止めなさいよ…。」

「しかし王女…。」

「止めなさいよって言ってんでしょ……ッ！！！」

私が怒鳴るように言うと、あなたは表情一つ変えずに言葉を返す。

「……失礼します。」

そう言うと兵長は立ち上がり、私の後ろまで歩いてきた。

「王女…。」

耳元であなたが囁く。

振り向くと、すぐそこにあるあなたの顔。

今日初めて目が合って……。

私は一瞬、目をそらす。

久しぶりにあなたと目が合って、恥じらいとも緊張とも呼べぬ何かを感じていたのかも知れない。

でも、それをあなたに悟られたく無かったから

すぐに私は、それらの感情を表情には出さずに真っ直ぐに兵長の眼を見た。

「……何よ、これ？」

兵長から受け取ったのは、彼が首から下げていたのと同じペンダントだった。

「そのペンダントは、元は一つだったクリスタルを二つに割り、半分になったそれぞれのクリスタルで作った二つのペンダントの一つです。もう片方は私の首にかかっております。」

あなたが自分の首から下がったペンダントを握り締めた。

「このペンダントを持った二人は、たとえ離れ離れになってしまっても必ず再会できるという伝説があります。」

「…なんでそれを私に渡すのよ……？」

「王女が言う通り、今の王はかなりのご乱心です。私が王に文句を付けに行けば、私はこの城を追われるかも知れません。そんな時…もし私が城にいないときに王女に危険が及んだ時、必ず私がここに戻ってきて王女を御護り出来るように、これを渡しておきたいのです。」

「…じゃあ行かなければいいじゃない…。ずっと私を護ってなさいよ…。」

本当の気持ちだった。

行かないで欲しかった。

あなたが、本当にどこか遠くに行ってしまいそうな…。

…そんな悪い予感がしていた。

「いえ、行かないわけにはいきません。あくまで予感ですが、王は何か良からぬことを計画している気がするのです。…放っておけば、大変な事になる気がするのです…。」

「だからって、あなたが行く必要は…。」

「私が行くべきなのです…。王は並大抵の人間の言うことを聞かないでしょう。しかし私は王国直属の護衛隊長であり、王の昔からの

知り合いで御座います。私の言うことなら、王も少しくらい耳を貸してくれる筈です。」

「なら、私が直接言った方が良いじゃない…。」

「それでは王女が危険に晒される事になります。」

「あなたが行けば、あなたが危険に晒される事になるわ。」

「私はいいのです。貴女と国さえ無事ならば…。」

よく無いよ…。

傍に……いてよ。

行かないで…よ。

私の事なんて、どうでもいいから…。

自己中だと、昔から親である王や王妃に言われてきた私にとっては、ザラでも無いことを思った。

でも、そう思った。

傍にいて欲しいと、本気でそう思った。

「……訂正するわ。これは命令よ、王に会いに行くのは止めなさい。」

「……その命令には従えません。」

……もう、我慢できなかった。

いつもなら、こんなのプライドが許さないけど…

それ以上に行ってほしく無かった。

「……お願い、行かないでよ。……ずっと傍にいてよ…。」

「……ッ……！…」

あなたが拳を握り締めた。

あなたは知ってる筈…。

私のプライドがどれだけ高いかを。

あなたは知ってる筈…。

私が、人に懇願をするような人間では無いことを。

あなたは知ってる筈…。

いつも命令口調、冷たい言葉遣いの私が、あなたに懇願するというのが、どれだけの意味を持つのかを。

「……申し訳…ありません。」

それでもあなたは、行くと言った。

私は知っていた。

どんなときでも忠実に私の命令を聞くあなたも、昔は一度決めたことは絶対に曲げない我儘な性格だった事を。

私は知っていた。

ここまで言って動かなければ、あなたは絶対に王に会いに行くことを止めない事を。

「……馬鹿…。」

「……申し訳ありません。」

「…馬鹿ぁッ……！！」

「……申し訳ありません。」

あなたに泣き顔は見られたく無かった。

溢れそうになる涙を必死に堪えた。

「…絶対に、帰ってきなさいよ。」

「……はい。」

そう言うしか無かった。

もう、行かないでとは言えない。

だからせめて、あなたの名を呼んでおきたかった。

兵長としてじゃなくて…

幼馴染みとして、無事を祈った。

「…私を一人にしたら許さないわよ、ソラ…。」

「……はい。」

あなたは一歩後ろに下がると、私に一礼して部屋を後にした。

部屋は私一人になったけど、泣かなかった。

なんていうか、私はそういう人間じゃない…。

昔からどこか冷めていて、泣くことなんて殆ど無かった。

独りだったから。

皆が私を王女と呼んだ…。

敬遠されていると感じた。

どこか、遠い存在に感じられた。

でも、彼だけは違った。

ソラの親は、私の教育係で…

私とソラはよく一緒に学んでいた。

私も彼も気が強くて、言い争いばかりしていた。
それでも、二人はいつもそばにいた。
私はあなたの傍らに。
あなたは私の傍らに。
独りじゃなかった。

そんな彼もいつしか、王国直属の兵士団の長となり…
同時に私の護衛隊長に就任した。
ガサツで、私の言うことなんか何も聞いてくれなかった彼が、私を
王女と呼ぶようになった。

…また独りになった気がした。

それでも私は、あなたの傍にいたいと思った。

いつか、また私の名前を呼んでくれる事を夢見て…

いつか、またあなたと喧嘩する事を夢見て…

握った手を開き、あなたに貰ったペンダントをを眺めた。

「……何…？これ…。」

割れたペンダントの断面に刻まれた、小さな文字を読み上げる…。

「f…ｏｒ……ソ…ラ…様…。」

《ｆｏｒソラ様》

そう書かれていた。

「……様って……堅苦しいって……ッ…。」

それでも、あなたが私の名を呼んだのは、二年ぶりの事だった。

二年前の、あの日から…。

あなたは私を王女と呼んだ…。

「…馬鹿ァ……ッ…！！」

私が涙を流したのも、二年ぶりだった。

二年前のあの日から…。

私は独りになった…。

まだあなたの温もりが残るペンダントを、胸に押さえつけた。

「ねぇ、知ってた……？」

独り呟く。

「私さ……あなたの事……。」

それより先は、言わなかった。

辛くなるだけだったから。

私は王女で…

あなたは兵長だから…。

ソラ＝ハルカゼ＝アレストロス１７世

ソラ＝レクソール

これは、二人のソラの物語……。

…ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．

１ｓｔ．「すれ違いの物語」（後書き）

始めてしまいました！初めてのオリジナル小説！！

初めまして、マヨラーです（＾＾ゞ

この度はＹｏｕｒ　ａｎｄ　ｍｙ　ｓｔｏｒｙ―君と私の物語―を読んで下さり、有り難う御座います。

ＤｏｕｂｌｅＡｒｔｓ　Ｌｅｇｅｎｄという二次創作連載を一年くらいやってるんですけど、いつかはオリジナルを書きたいと思っていました。

そして一年間練った設定がこの作品には詰まっているというわけです。

ノロノロ更新のファンタジー小説ですが、今後も読んでくださると嬉しいです！

では、二話目でまた会いましょう！

追記：１２月１６日に小説タイトルを「空―ｓｋｙ―追スル者」から『Ｙｏｕｒ　ａｎｄ　ｍｙ　ｓｔｏｒｙ―君と私の物語―』に変更、第一話の本文を変更しました。

よろしくお願いします（＾＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9261i/

Your and my story-君と私の物語-

2010年10月13日13時32分発行